王朝日記物語論叢

室伏信助
Muroffushi Shinsuke

笠間書院

信助 Nobusuke Shinoda

朝日記物語論叢

笠間書院

■著者略歴

室伏信助（むろふし　しんすけ）

1932年生まれ。國學院大學大学院博士課程修了。

跡見学園女子大学教授、東京女子大学教授を経て、

現在、跡見学園女子大学名誉教授。文学博士。

昭和49年、第３回武田祐吉博士記念賞。

平成８年、第18回角川源義賞を受賞。

著書・論文等は、著書目録参照。

王朝日記物語論叢（おうちょうにっきものがたりろんそう）

2014年10月20日　　初版第1刷発行

著者　室伏信助

発行者　池田圭子

発行所　有限会社　笠間書院

東京都千代田区猿楽町 2-2-3〔〒101-0064〕

電話 03-3295-1331　Fax03-3294-0996

NDC 分類：913.3

ISBN978-4-305-70738-3

新日本印刷

〔本文用紙・中性紙使用〕

© MUROFUSHI 2014

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

出版目録は上記住所または下記まで。

http://www.kasamashoin.co.jp

はじめに

本書は、前著『王朝物語史の研究』に収録できなかった日記文学と随筆を第一章とし、第二章は源氏物語を中心とした物語文学によって構成されている。従って表題にも示した「王朝日記物語」とは、いわゆる日記文学と物語文学とを含めた呼称だが、しかし、この「日記物語」という呼称には、いま一つの意味がこめられている。その「日記」とは、実録としての日記ではなく、実録に拠りながらも、それを虚構化して成立した作品なのである。現在ではそれを一般に「日記文学」と称しているが、当時の呼称に即していえば、むしろ「日記物語」というにふさわしい作品なのである。著名な例として「和泉式部日記」は、多くの伝本で「和泉式部物語」として伝わっている。また「伊勢物語」と「在五中将の日記」や「平中物語」と「平中日記」など相通する呼称は数多い。

ことほどさように、日記文学と物語とは、古人の意識において相通するものがあったから、近代に成立した日記文学という呼称よりも当時の実感に即した呼称といえよう。ただ表題としては、物語文学と並称することから、一種の掛けことば的呼称と考えたい。

また「随筆」は「枕草子」関係の論で、作品論も含むが、作品の形態としては、他に類例のない特異な存在。随想ともいえる内容だが、呼称としては通称の「随筆」が分りやすいのでそれを用いた。

さて、第二章の物語文学については、本文研究を中心とした論考で、源氏物語を論じたものが多いが、その内

容が主題や人物論に及ぶ場合も、常に原典のありようを見つめ、そこから問題を究明することを第一義としている。従って問題が多岐にわたる場合も、本文を通してその表現を吟味し、外在的な事象に拡散しないよう注意している。なぜならば拡散する方向の研究は、文化（史）研究であって、文学研究ではないからである。

本文研究は当然のことながら、異文をどう考えるか、異文をどう扱うかという問題と密接している。その場合も対象とする本文をまず正確に読解することが求められる。そこから、異文や異文を含む異本との対峙、対決が始まるが、文法的な誤謬は正さなければならないが、異文（異本）を採用せざるを得ないような場合には、必ず事由を添えて示すことを原則としている。安易に理解しやすいからといって他本の表記に従ってはならない。なぜならば、その一本に込められた古人の思いを最大限尊重しなければ、古典を読む意義を失うからである。

王朝の作品では、土佐日記を除いて原作に復原しうる作品はなく、従って多数の伝本のうちの一本を採り上げて、許される限りの校訂を施しても、それが原作であるという保障はどこにもない。従来の研究は、原作に戻すという妄信のために、一本一本に込められた古人の思いを軽視し過ぎたのである。

第二章はそのことを縷々述べ来たったが、そこから派生するさまざまな興深い問題は、最終節の座談に開陳されている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

王朝日記物語論叢　目

はじめに …… i

第一章　物語としての日記文学と随筆

第一節　日記物語

『土佐日記』と貫之 …… 4
憧憬の愛――伊勢 …… 24
『秋山虔　伊勢』（王朝の歌人5）［書評］ …… 28
ことばの芸術への果敢な挑戦　『秋山虔　伊勢』（ちくま学芸文庫）解説 …… 30
『蜻蛉日記』の文学史的位置――その表現史的位相をめぐって―― …… 37
『蜻蛉日記』研究の近景――序文の読みをめぐって―― …… 48
『蜻蛉日記』の序文と下巻の世界 …… 54
かくありし時過ぎて―歌から散文へ― …… 70
『紫式部日記』研究の問題点――展望と動向をめぐって―― …… 73
『紫式部日記』の表現機構――「十一日の暁」をめぐって―― …… 96
『紫式部日記』の虚構と他者 …… 113
『紫式部日記』の消息体文――その不思議な表現世界―― …… 128
『紫式部日記』における『源氏物語』
――「こころみに物語をとりて見れど見しやうにもおぼえず」をめぐって―― …… 149
『紫式部日記』の語法存疑 …… 164

紫式部論――その可能性をめぐって――……169
第二節　随筆……185
清少納言……186
枕草子……187
『枕草子』一――一〇〇段……196
『枕草子』前田家本の性格……241

第二章　物語文学

第一節　『伊勢物語』と『竹取物語』……253
物語を喚びおこすうた……254
『伊勢物語』の成立展望……265
『伊勢物語』をどう読むか――『伊勢物語童子問』遠望――……280
『竹取物語』の世界……284
王朝文学と漢詩文――『竹取物語』をめぐって――……305
第二節　『源氏物語』をめぐる諸問題……321
大島本『源氏物語』採択の方法と意義……322
人なくてつれづれなれば――『源氏物語』の本文と享受――……333
『源氏物語』の本文……349
大島本『源氏物語』研究の展望……354

明融本「浮舟」巻の本文について……377
大島本『源氏物語』の再生――新大系本の本文作成過程――……398
幻想から理想へ――源氏物語本文整定の方法――……409
『源氏物語』の本文とはなにか――大島本「初音」巻をめぐって――……424
『源氏物語』の巻末異文……434
未だ不審を散ぜず――源氏物語の本文整定――……442
『源氏物語』の諸本　青表紙本の展望……454
本文研究を再検討する意義……466
國學院と源氏物語研究――本文研究をめぐって――……476
一本を見つめるということ――源氏物語　千年紀に憶う――……491
「とぞ本に」という結び……495
源氏物語の人物造型　末摘花……498
明石君物語の主題――驚異の表現と文脈の理路――……505
続篇の胎動――匂宮・紅梅・竹河の世界――……533
源氏物語とキツネたち……548
『源氏物語』と「冬のソナタ」（前半）……558
初出一覧……595
著作目録……598
あとがき……607

第一章　物語としての日記文学と随筆

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一節　日記物語

『土佐日記』と貫之

一

『土佐日記』を読んでいると、ずいぶんことばの上の洒落や諷刺に筆をついやしている姿が目につく。ところが、それとはおよそうらはらの、作者貫之の生まなましい情念のほとばしりに出会って、一瞬どきりとすることがある。諷刺・諧謔のたぐいも、たしかに作者の内心と深いかかわりをもつには相違ないが、それは多分に歪められた声であり、じかの肉声とはいいがたい。

それに反して、気持の余裕もなく、昂ぶった感情をそのまま、思いきりぶちまけたすがたは、『土佐日記』という、一見単純にみえて、複雑な要素から成り立つこの作品を理解する上に、最初の手がかりを与えるものである。なぜなら、これは疑いなく作者の生まの声であり、記録という外的条件をはじめて解き放った個人の内なる声を、直接ききとることができるからである。

しかし、問題は、この内なる声が、常に一定の視点から打ち出されているのではないところにある。そこに作者の心の屈折をよみとるのは容易だが、その屈折がいかなる方法によって、『土佐日記』というユニークな作品を形造っていったか、そのあとを作品の形象に即しながら、断片的ではあるが、問題点を微視的にきわめることによって、晩年の貫之が、文学史の上に演じなければならなかった独自な役割の一端を、理解したいとおもうのである。

二

まず二月五日の記事から見てゆこう。「石津といふところの松原おもしろくて、浜辺遠し。また、住吉のわたりを漕ぎゆく。」航海もはじめのうちは順調で、船上の貫之はすこぶる機嫌がよい。ところが、

ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、しりへ退きに退きて、ほとほどしくうちはめつべし。楫とりのいはく、「この住吉の明神は例の神ぞかし。欲しきものぞおはすらん」とは今めくものか。さて、「幣をたてまつり給へ」といふ。いふに従ひて幣たいまつる。

しかし、一向にききめがない。楫とりは重ねていう。「幣には御心のいかねば、御船もゆかぬなり。なほ、うれしとおもひ給ぶべきものたいまつりたべ。」幣ではどうやら御不満のようす、もっと神様のおよろこびになるものをさしあげよ、と。そこで仕方なく、「まなこもこそ二つあれ。ただ一つある鏡をたいまつる」と、口惜しく思いながらも、大事な鏡を投げ入れた。とたんに「海は鏡のごとくなりぬれば」効果てきめん、霊験あらたかな神威をたたえ、船ばた叩いてよろこぶかと見れば、さにあらず。

ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな

神様の正体見ぬいたぞ、とばかりすかさず一矢報いる。つづいていうことばがふるっている。「いたく、住の江・忘れ草・岸の姫松などいふ（優雅ナ）神にはあらずかし。目もうつらうつら（＝マザマザト）鏡に神の心をこそは見つれ。楫とりの心は神の御心なり。」

たしか出発の際、「和泉の国までと平らかに願立」て、無事和泉の灘にいたるや、「神仏のめぐみかうぶれるに似たり」とよろこんだはずだ。しかしそれも束の間、たちまち神の正体を見破って罵倒する。このあたり、近藤

一一氏の適切な評言[注1]を拝借したい。上記の部分――それは「貫之の心のひだひだの一つ一つを刻明に表示している。貫之の怒りは、ひとりかぢとりに対し爆発したばかりでなく、住吉の明神に対しても会釈なく爆発する。女という仮面さえもいつのまにか脱ぎすててしまっている」と。

女という仮面――それはこの日記の冒頭に述べられた「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり」という、日記文学史上それこそ画期的な発言の中に見られたものである。ではなぜ貫之はこの女装をあえてしたのだろう。「それは貫之が、自由に卒直に、不遠慮に、自分の感じた事を、抽象的にではなく、具体的に、此所で表現したかった為ではないか」と、かつて小宮豊隆氏[注2]が述べられたとおり、女装は、男性官僚としての規制を断ち切る不可避の条件であったろう。なぜなら、従来、男性による漢文の日記形式では、表記の面でも、また記録性の点でも、日記の伝統的制約を免れることはできなかったからである。

しかし、それならば、どうして女装に徹し切らず、時として平然と仮面をぬぎすてるのか。小宮氏のいわれるように、女装することが自由な自己の表現につながるものならば、それはまた、女装という制約すら乗りこえるものなのか。でも今は、性急にこの解答を求めることをしまい。もう少し、女という仮面すら脱ぎすててはばからない作者の生まの姿に接しなければならないだろう。

三

二月十六日の記事に目を移そう。無事、舟旅もおわり、いよいよ都入りとなる。なつかしのわが家にたどり着いて、まず目に入ったものは何か。

家に到りて、門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこ

ぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。

人間に対する不信感の端的な表明。しかし、ここはそれだけではとてもすまなかったらしく、くどくどと愚痴をこぼしている。「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、（向ウカラ）望みてあづかれるなり。さるは、便りごとにものも絶えず得させたり。こよひかかることと、声高にものもいはせず。いとはつらく見ゆれど、心ざしはせんとす。」恨みは深いのだろう。むこうから望んで家を預り、それに対しても、こちらはちゃんと義理をつくした。それなのになんだ、このざまは、と吐き出すように言いたげな、老貫之の苦り切った表情を見る思いがする。

しかし、ここで注意したいのは、「こよひかかること……」の部分についてである。この文の主体——貫之の心意や態度は、「声高にものもいはせず。いとはつらく見ゆれど、心ざしはせんとす」であること、言うをまたない。その点、諸説も一致している。ところが、その上の部分については、「かかること」だけを従者たちの言とし、「なんや、これは。よう言はんわ」と訳された小西甚一氏の解[注3]などが代表的なものであろう。一方、日本古典全書その他に示された萩谷朴氏の解[注1]は異色である。すなわち、(A)「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり」(B)「さるは、便りごとにものも絶えず得させたり」(C)「こよひかかること」をそれぞれ別個の発言とみて、そこに対話を読みとるのである。「久し振りに帰宅した貫之の一家の人々が、あまり甚しく邸の荒れていることに気付いて、つい隣人への不満を洩らしたくなって、口々に語った言葉を極めてヴィヴィッドに描写したもの」と解していられる。しかし、この斬新な解釈に対しては、いくつかの批判があり、今それらを要約したかに見える鈴木知太郎氏の注[注5]を記すと、①『土佐日記』全篇中に、かように会話がいくつも重って出てくる場面のないこと、②会話中の(A)と(B)とは具体的な内容を持っているのに、(C)だけは抽象的で、ちぐはぐな感じをまぬかれぬこと、③(A)(B)特に(B)の内容は、むしろ家主（貫之）の言うべきことなのに、それを他人（たとえ従者にしても）が言うのは理に合わぬし、また出すぎたきらいのあること、なお、萩谷氏は「さるは」を前文を

受けた同感の語として「そうだとも」と口訳しておられるが、「さるは」をそのように解釈するのも、どうかと思うし、また「便りごとに」へのつなぎも、やや不自然であること、④Ⓒの「こよひかかること」の「こよひ」が、会話としては落ち着きの悪いこと、などである。上のうち、①はその例がないということからだけ見れば納得もされようが、その状況から特異例とは見られないか。また②ではⒸの「こよひ……」の抽象性が疑問とされているが、上からの対話性を考えに入れれば、しいてここに具体性をもたせる必要もなくなる。また③も、Ⓐ Ⓑの発言の内容から見て、貫之とするのが穏当だが、それとても主人側に立った発言と見られないこともない。④の「こよひ」の落ち着きの悪さは、実のところ、地の文と見ても同様である。以上の理由によって、萩谷氏の仮説を全面的に否定することは、急には困難であろう。とすると、ここに会話を認めるべきであるか。

これほどまでにこの部分が問題となるのは、単に通釈上の問題ばかりでなく、ここに作者貫之の意識の屈折が、まざまざと読みとれるからである。解釈にこだわりなく、上から素直に読んでみよう。ここは疑いなく、老貫之の愚痴なのである。そのぐちも次第に積み重ねられると、思わず「声高に」もなろうというものだ。たとえここが対話であろうとなかろうと、ヴィヴィッドな感情の昂まりを感知しない読者があろうか。それを貫之は書かずにはいられない。にも拘らず、「声高にものもいはせ」てはならぬと思う貫之の態度が、いま一方にある。それを「いとはつらく見ゆれど」とうけ、心意にさからう行為としての「心ざしはせんとす」にかかってゆくのである。

一方では、相手の不実を心ゆくまで責めて気を晴らしたい貫之が、そのまま行為としては示しえぬいま一方の貫之と相克するすがたが、そこにある。一文について両説が対立するそもそもの原因は、心余りてことば足らぬ貫之自身にも責任があるわけだが、これほどよく貫之という人間のすがたを、はしなくも表現した個所も亦、少なかろうとおもう。とんだところで業平の仕返しをうけたものだという前に、極限的状況における貫之の表現行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com